
実践報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 8
P.58-69 (2020)

実習前 OSCE の実施方法変更の影響と今後の課題

Impact of Changing the Method of OSCE before Clinical Practicum and Future Issues

酒 井 太 一*	藤 尾 祐 子*	石 塚 淳 子*
SAKAI Taichi	FUJIO Yuko	ISHIZUKA Junko
宮 崎 仁 美*	齊 藤 麻 子*	阿 部 詠 子*
MIYAZAKI Hitomi	SAITO Asako	ABE Eiko
浦 川 加代子*	近 藤 ふさえ*	大 熊 泰 之*
URAKAWA Kayoko	KONDO Fusae	OKUMA Yasuyuki

要 旨

目的：2018 年度に実施した OSCE における実施方法（課題の出題範囲と出題方法）の変更による学生の学習への影響を確認するとともに、本学部の OSCE の意義と課題を明らかにし、今後のあり方を検討することを目的とした。

方法：調査対象者は 2018 年度 OSCE 受験者とし、その比較として前年度（2017 年度）受験者のデータも用いた。両年度ともに無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は基本属性、事前学習の実施状況とした。さらに、OSCE についての感想を自由記述にて求めた。分析方法は、数量データについては 2018 年度と 2017 年度を統計的に比較した。自由記述については 2018 年度分をテキストマイニングした。

結果：事前学習の実施状況は 2018 年度と 2017 年度で有意な差はなかった。テキストマイニングでは、「緊張」の単語が最も出現回数が多く、「試験内容を振り返る内容」「学習姿勢を振り返る内容」、そして両方を含む共起ネットワークが見られた。

考察：2018 年度の実施方法の変更は、学生の事前学習の取り組みを減少させるなどの負の影響を生じさせることはなかった。OSCE は、受験者に「緊張」を与えるが、実習に向けた自己学習などの好ましい学習態度を引き出すきっかけになると考えられた。

索引用語：OSCE（客観的臨床能力試験）、看護教育、テキストマイニング

Key words：OSCE (Objective Structured Clinical Examination), Nursing education, Text mining

1. はじめに

近年、看護基礎教育における技術教育についての在

り方があらためて注目され、文部科学省及び厚生労働省の両省からいくつかの報告書が示されている。まず、文部科学省からは、2002 年に「大学における看護実践能力の育成に向けて」¹⁾において、最低限身につけておくべき技術学習項目がまとめられ、看護基

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

(Nov. 8, 2019 原稿受付) (Jan. 31, 2020 原稿受領)

本技術として13の学習項目が示されている。そして、2004年には「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告）」²⁾において、5群19項目からなる学士課程で育成する看護実践能力が示された。さらに、2011年には「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」³⁾において、看護実践を構成する5つの能力群とそれぞれの群を構成する20の看護実践能力が示された。一方、厚生労働省でも2003年に「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」⁴⁾において、看護基礎教育での技術教育の改善を図るために、学生の看護技術の実施に関する3つの水準（単独実施、指導・監視のもとで実施、見学）が示されている。

このように看護基礎教育における技術教育の重要性があらためて示され続けていることを背景に、順天堂大学保健看護学部（以下、本学部）では、その理念である「心身を癒す看護」の実現のための一環として2015年から新たに客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination、以下OSCE）を開始した。特に、本学部では「実習前OSCE」として3年生の後期（9月）から本格的に開始される領域別の臨地実習（以下、領域実習）の直前に実施している。このねらいは、領域実習において看護学生としてふさわしい態度・到達すべき看護技術を身につけているか否かを明らかにすることである。

実習前OSCEについては、これまでにいくつかの先行研究でその取り組みが報告されている。実習前OSCEの受験者別で見ると、看護専門学校生^{5,6)}、看護系大学生⁷⁻⁹⁾、さらに新人看護師¹⁰⁾に対して学生時に実施したOSCEの振り返りに関する報告もある。また、実際のOSCEで生じる評価者間の評価のズレについて、OSCE評価者^{11,12)}を対象とした検討も報告されている。一方、実習前OSCEに関する課題としては、その実施方法について、出題内容の適切性^{7,10)}、

事前学習として提示する内容¹³⁾、学生の強い緊張感⁷⁾、評価基準^{11,12,14)}、そして模擬患者への配慮⁷⁾などが報告されている。さらに、実習前OSCEの実施に付随する課題としては、技術演習内容の教員間における統一¹³⁾、学年歴における時間の確保⁵⁾、実習における効果の評価⁹⁾、そして教員の負担⁵⁾も報告されている。このように実習前OSCEに関しては、それぞれの養成機関における取り組みと共に、さらに改善していくための課題も明らかになっている。

本学部においても、実習前OSCEの取り組みは、2015年に初めてトライアルとして位置づけて実施し、その後2016年から2018年までの3回を本格的に実施している。また、その間は常にPDCAサイクルを回しながら、大小の試行錯誤を繰り返してきた。本稿では、2018年度の最新の改善の取り組みを紹介するとともに、それを評価することで、さらなる改善について検討したので報告する。

II. 目的

2018年度に実施したOSCEにおける実施方法の変更による学生の学習への影響を確認するとともに、本学部のOSCEの意義と課題を明らかにし、今後のあり方を検討することを目的とする。

III. 本学部のOSCEについて

1. 本学部のOSCEのねらい

本学部のOSCEでは、「領域実習にあたり、看護学生としてふさわしい態度・到達すべき看護技術を身につけているか否かを明らかにすること」をねらいとしている。また、その副次的な効果として、①学生はOSCEに備えて看護技術の復習を行うため、技術レベルの向上を図ることが期待できる。②試験結果を学生にフィードバックすることにより、学生は自分の不得手部分を自覚でき、学生の自己学習を促すことができる。③教員は学生の成績の傾向を把握することにより、

教育の改善を図ることができる。④極端に成績不良の学生に対して補習を実施し、領域実習での不測の事故を未然に防ぐことができる。などの4つの事柄を期待している。

なお、本学部 OSCE のねらいや副次的な効果をまとめたものをコンセプトとして図1に示した。前述のとおり、OSCEの実施は、学生や教員・実習指導者にとって恩恵は大きい。ただし、本学部の OSCE が実習前 OSCE であることを踏まえると、実習において関わる患者・地域住民にとっても恩恵があることが望ましい。具体的には、OSCE を実施することで患者・地域住民は学生の看護技術やその態度に「安心」したり、「信頼」したりすることができると考えている。このように、実習前 OSCE によって学生、教員・実習指導者、患者・地域住民の三者間において互恵的関係が築かれることを期待している。

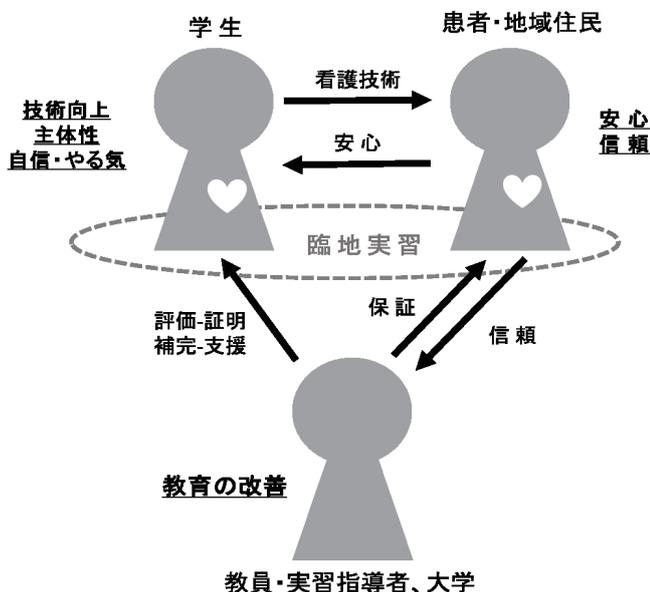


図1 保健看護学部OSCEのねらいと目的

2. 基本方針

OSCE 実施の基本方針について、2018年度の変更内容について表1に示した。

「到達度」は前年度と変更はなく、「領域実習にあたり必要最低限身につけておかななくてはならないレベル」とした。「課題」は出題範囲と出題方法を前年度から変更した。具体的には、出題範囲を精選し、事前に学習課題を学生に明示することにした。まず、出題範囲の精選としては、これまで既習した3科目から「生活援助技術」と「フィジカルアセスメント」の2科目に絞った。その理由は、削除に該当した「診療・治療援助技術」の学習内容が実際の3・4年生で行う領域実習においては「見学して学ぶレベル」に該当することが挙げられる。前述の到達度で示した「必要最小限身につけておかなければならないレベル」という視点を踏まえつつ、出題範囲を絞ることにより、学生が事前学習・練習に取り組むための心理的障壁を下げることを意図した。次に、出題内容の明示としては、試験当日の出題内容を学生に秘匿することを止めた。これまでは「バイタルサイン測定」「シーツ交換」……などの8つの出題内容を事前に示しはするものの、実際に出題するのはそのうち4つで、何が出題されるかは学生に秘匿していた。しかし、2018年度からは4つの出題内容を事前に示し、それをそのまま出題することにした。これにより、学生が事前学習・練習に取り組む動機づけを高めることを意図した。なお、実際の事前提示内容と当日の出題内容は表2に示した。

3. 実施方法

本学部において OSCE の受験対象となるのは、領域実習を履修前の3年生である。また、実施時期は領域実習が開始される直前の9月としている。

試験の流れは、一課題あたり約10分を連続して4課題行う。受験生はアナウンスの指示に従って試験ブースに入り、掲示された課題内容と状況設定を1分間で読む。そして、開始の合図と共に7分間で課題を実施する。終了の合図の後には、2名の評価者から簡潔なフィードバックを受ける。その後次課題の試験ブース前に移動し待機するという流れである。なお、

表1 OSCEの基本方針の変更内容

	2017年度	2018年度	備考
到達度	本学部OSCEの到達目標である「最も初歩的なレベル」、つまり「領域実習に臨むにあたり必要最低限身につけておかななくてはならないレベル」への到達を確認するものとする。	同左	
課題	2年次までの既習科目である「生活援助技術」「診療・治療援助技術」「フィジカルアセスメント」で習得した基礎看護技術が、領域実習で経験する対象者や場の特性に応じて実施できることを確認する。	2年次までの既習科目である「生活援助技術」と「フィジカルアセスメント」で習得したの基礎看護技術が、領域実習で経験する対象者や場の特性に応じて実施できることを確認する。「診療・治療援助技術」の内容は領域別実習においては見学して学ぶレベルであることから、この時点での実習前の習得は求めないこととする。 試験当日まで秘匿してきた出題課題を学生に事前に明示する。これにより、学生が①領域実習までに正確な技術を習得できること、②主体的に技術練習へ取り組みやすくなること、③自信の醸成と過度の緊張・不安の払拭ができることを目指す。	2018年度は、出題範囲の精選と課題の明示を変更した。
実施方法	実施方法は、2015年度トライアルOSCE、2016年度OSCEの実施経験と物品を活かす。大きな変更や試みは行わない。	これまでのOSCEの実施経験と物品を活かす。大きな変更や試みは行わない。	

下線部が2018年度の主要な変更点

表2 事前提示内容と当日の出題内容

	2017年度	2018年度
事前提示内容	① バイタルサイン測定 ② シーツ交換 ③ 車いす移乗 ④ 寝衣交換 ⑤ 陰部清拭とおむつ交換 ⑥ 吸引・酸素吸入 ⑦ 導尿 ⑧ 経管栄養の注入	① バイタルサイン測定 ② 車いす移乗 ③ 寝衣交換 ④ シーツ交換
当日の出題内容	① バイタルサイン測定 ② 車いす移乗 ③ 寝衣交換 ④ 吸引・酸素吸入	① バイタルサイン測定 ② 車いす移乗 ③ 寝衣交換 ④ シーツ交換
備考	8つの内容を事前に提示し、そのうち4つを出題した。	事前提示内容と出題内容を同一とした。

全ての課題にいる模擬患者には、ボランティア団体や近隣住民の協力を得ている。

IV. 研究方法

1. 調査対象及び調査実施日

本研究では 2018 年度 OSCE を検討するために、その比較として前年度（2017 年度）のデータも用いた。調査対象者は、2018 年度が 119 名、2017 年度が 123 名であった。また、調査実施日はそれぞれ 2018 年 9 月 19 日（水）、2017 年 9 月 20 日（水）で、いずれも OSCE 実施当日である。

2. データ収集方法

データの収集は、OSCE 終了後に試験会場とは別の控え室にて行った。4 年生ボランティアによって調査の目的・方法を説明した後に、無記名自記式質問紙を配布した。回収は、控え室内の回収箱とし、質問紙記入後に学生自らが投函した。なお、質問紙への回答は任意とした。

3. 調査内容

調査内容は、基本属性として性別、年齢とした。OSCE に向けての事前学習の実施状況については、事前学習の実施の有無、実施回数、1 回あたりの実施時間とした。さらに、OSCE に関する感想を自由記述にて求めた。

4. 分析方法

分析方法は、各調査内容について基本統計量を算出した。また、2017 年度と 2018 年度の 2 群間でデータの比較を行った。検定は、Fisher の正確検定、Mann-Whitney の U 検定とし、有意水準を 5% 未満とした。全ての統計解析には EZR¹⁵⁾ を使用した。EZR は R 及び R コマンドを拡張した統計ソフトウェアであり、自治医科大学附属さいたま医療センターのホームページで無料公開されている。

自由記述内容は、2018 年度の自由記述データを用いてテキストマイニングを行った。まず、一つの質問

紙あたりの自由記述を一データとして用意した。次に、形態素解析の結果から、複合語として抽出すべき単語の指定を行った。具体的には、「スマホ」「健側」「寝衣」などが挙げられる。テキストマイニング手法としては、単語の出現回数と共起ネットワーク解析を行った。単語の出現回数については、頻出する上位 50 語の抽出語リストを作成した。共起ネットワーク解析においては、分析対象となる単語として全データのうち最低でも 3 回以上出現していることを条件とした。分析ソフトには、樋口¹⁶⁾が開発したテキストマイニングソフトである KH Coder (version 2.00f) を用いた。

5. 倫理的配慮

本研究のデータの収集は、OSCE 運営の評価・改善に用いることを当初の目的としていたため、事前に研究者が所属する機関における倫理申請を行わなかった。したがって、本稿の執筆にあたっては、順天堂大学保健看護学部研究等倫理審査会のオプトアウトの承認を得た（順保倫第 1-11 号）。データの収集方法は、無記名自記式質問紙とし、学生個人の特定ができないことや、回答の有無や内容によって学業や学生生活においていかなる不利益が生じないことを事前に伝えた。また、回答は学生の任意とし、調査を教員が行うことで強制力が生じないように、調査の依頼は上級生の学生ボランティアが担い、質問紙の回収も回収箱に学生自らが投函してもらうこととした。

V. 研究結果

1. 対象者の基本属性（表 3）

質問紙の回収数及び回収率は、2017 年度が 123 件で回収率 100.0%、2018 年度が 118 件で 99.2% だった。対象者の性別は、2017 年度が男性 12 人（9.8%）、女性 111 人（90.2%）、2018 年度が男性 15 人（12.7%）、女性 103 人（87.3%）だった。平均年齢（±標準偏差）は、2017 年度が 20.6 ± 0.5 歳、2018 年度が 20.5 ± 0.5 歳だった。性別、平均

表3 基本属性

		2017年度 N=123	2018年度 N=118	P値
性別	男性	12人 (9.8%)	15人 (12.7%)	0.54
	女性	111人 (90.2%)	103人 (87.3%)	
平均年齢		20.6 ± 0.5 歳	20.5 ± 0.5 歳	0.45

Fisherの正確検定、Mann-WhitneyのU検定

表4 OSCEに向けての事前学習の実施状況

		2017年度 N=123	2018年度 N=118	P値
事前学習の実施	した	123人 (100%)	116人 (98.3%)	0.24
	しない	0人 (0%)	2人 (1.7%)	
実施回数 ^a	平均±標準偏差	4.3 ± 1.9 回	4.8 ± 2.9 回	0.59
	最大	10 回	20 回	
	最小	1 回	1 回	
1回あたりの実施時間 ^b	平均±標準偏差	3.6 ± 1.4 時間	3.6 ± 1.6 時間	0.38
	最大	10 時間	15 時間	
	最小	1 時間	1 時間	

Fisherの正確検定、Mann-WhitneyのU検定

a 2017年度 n=122, 2018年度 n=116

b 2017年度 n=123, 2018年度 n=116

年齢共に2017年度と2018年度との間に有意な差はなかった。

2. OSCE に向けての事前学習の実施状況 (表4)

OSCE に向けて事前学習の実施率は、2017年度が100.0%、2018年度が98.3%だった。事前学習の平均実施回数(±標準偏差)は、2017年度が4.3 ± 1.9回、2018年度が4.8 ± 2.9回だった。また、1回あたりの実施時間(±標準偏差)は、2017年度が3.6 ± 1.4時間、2018年度が3.6 ± 1.6時間だった。事前学習の実施率、平均実施回数、1回あたりの実施時間の全ての項目で2017年度と2018年度との間に有意な差はなかった。

3. テキストマイニング

1) 分析対象単語

テキストマイニングによる分析対象となった単語は、総単語数(分析対象となった単語の延べ数)が1,561語、異なり単語数(単語の種類数)は464語だった。なお、これらの数は、助詞や助動詞のようにどのような文章でも用いられる一般的な語は含まれてはいない。

2) 単語の出現回数(表5)

出現回数が多かった順に上位50の単語を表5に示した。「緊張」の出現回数48回を筆頭に「患者」「思う」「練習」「実習」となっていた。順位及び出現回数は、上位10位では48~15回だった。また、14位

表5 類出語(上位 50)

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	緊張	48	20	部分	7
2	患者	38		麻痺	7
3	思う	36	28	援助	6
4	練習	30		会話	6
5	実習	29		言う	6
6	行う	28		車いす	6
7	自分	21		状況	6
8	課題	17		声	6
	技術	17		知る	6
10	考える	15		分かる	6
	実際	15	36	シート	5
	難しい	15		気	5
	復習	15		向ける	5
14	コミュニケーション	13		行える	5
	感じる	13		柵	5
16	事例	10		時間	5
17	ケア	8		人	5
	頭	8		注意	5
	必要	8		不安	5
20	交換	7		忘れる	5
	実技	7		良い	5
	場	7		領域	5
	状態	7	48	イメージ	4
	対応	7		安全	4
	大切	7		頑張る	4

から 20 位までは 13～7 回、28 位から 50 位までは 7～4 回であった。

3) 共起ネットワーク (図 2)

共起ネットワークでは、7つのネットワークが認められた。また、これらのネットワークは、ネットワークを形成する単語が含まれる自由記述の内容から、「試験内容を振り返る内容」のネットワーク群 (図中①～③) と「学習姿勢を振り返る内容」のネットワーク群 (図中⑤～⑦)、そして両方を含むネットワーク (図中④) に大別された。

まず、「試験内容を振り返る内容」のネットワークとしては、「車いす」「移乗」「健側」などの単語によるネットワークがあった。これらの単語 (以下、下線部) が含まれる自由記述は、「車いす移乗はもう少しベッドの端に寄ってもらってから起き上がってもらいべきだった。車いすは健側の頭側、立つときの補助が大切。」「車いすの移乗で麻痺側に移動させてしまって後悔した。」などがあった。次に、「学習姿勢を振り返る内容」のネットワークとしては、「大切」「知識」「痛感」などの単語によるネットワークがあっ

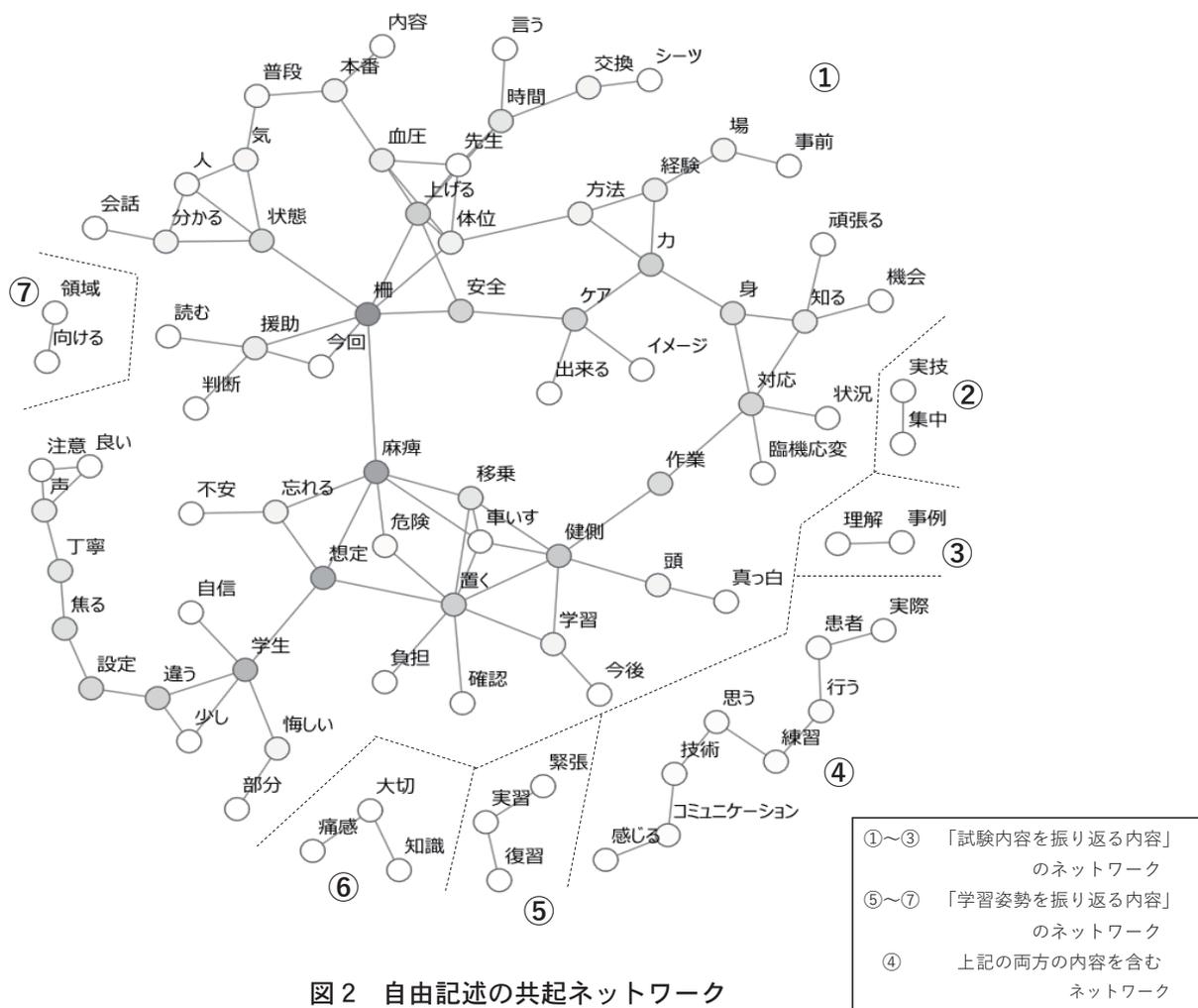


図2 自由記述の共起ネットワーク

た。これらの単語（以下、下線部）が含まれる自由記述は、「臨床の場（注：原文のまま）を用意してもらい、事前に準備することの大切さを痛感した。」「自分の知識が大切だと思った。だからこそもっと自分の知識を深めて配慮、考えられるようになりたいと思った。」などがあった。

なお、最も出現回数が多かった単語である「緊張」は、「実習」「復習」とネットワークを形成していた。これらの単語（以下、下線部）が含まれる自由記述は、「緊張した。実習までにアドバイスいただいたことを復習しておきたい。」「とても緊張したが、自分の実力を知るいい機会だった。しっかりと復習して実習

に臨みたい。」などがあった。

VI. 考察

1. OSCE 出題方法の変更による事前学習への取り組みの影響

2018年度OSCEの大きな変更点は、出題範囲の精選と出題内容の明示だった。これらの変更に伴う事前学習の取り組みへの影響については、事前学習の実施率、平均実施回数、一回当たりの平均実施時間において、2018年度は前年度（2017年度）に比べて有意な変化はみられなかった。

2018年度に出題範囲の精選と出題内容の明示をす

ることにあたっては、教員間において慎重な検討がなされた。その理由としては、事前学習に取り組みやすくするための配慮が、学生にとっては OSCE が易しくなったと捉えられ、逆に学習意欲や学習量を減少させるのでないかとの懸念があったためである。しかし、事前学習の実施率等から見ると、実際にはこれらの懸念は現実化することなく、学生の取り組みに変化はなかったと考えられる。多賀ら⁷⁾は、学生に対するインタビュー調査から、OSCE は学生にとって「学びの機会」として認識されていると報告している。また、勝田ら¹⁰⁾は、卒後1年目の新人看護師に在学中 OSCE を振り返らせたグループインタビューから、OSCE の効果は「OSCE によって迫られるスキルトレーニング」であると実感していることも報告している。したがって、実習前 OSCE とは、その実施自体が既に大きな学習の機会と学生に認識されており、2018 年度に試みた OSCE の出題方法の変更では、教員側が懸念するような負の影響はないことが示唆された。

ただし、2018 年度においては2名の学生が事前学習をしないままに OSCE に臨んでいた。本学部の OSCE は、副次的な効果として看護技術の復習や自己学習の促進を期待している。したがって、全く事前学習をしなかった者がいたことは、たとえそれが少数であったとしても重大な問題である。この問題の解決案としては、事前学習期間中に自己学習の実施状況を確認することが考えられる。具体的な確認方法については今後の検討が必要であるが、例えば、紙媒体あるいは ICT を用いて自己学習状況の記録・報告を学生に課すことも一案である。これにより自己学習が著しく乏しい者については、適宜教員から助言をすることが可能になる。また、このような記録は、学生が自己学習状況を自ら把握し管理する一助となることも期待される。

2. OSCE 実施と学生自身の振り返り

学生の自由記述のテキストマイニングから、その記述内容は「試験内容を振り返る内容」と「学習姿勢を振り返る内容」に大別された。また、自由記述の中で最も頻出した単語は「緊張」で、「実習」「復習」といった単語と共に述べられていたことが明らかになった。OSCE は、単なる看護技術の習熟を査定する場ではなく、学生自身の学習態度にとって好ましい影響を与えることが考えられる。

まず、記述内容が「試験内容を振り返る内容」と「学習姿勢を振り返る内容」に大別されたことについては、共起ネットワーク(図2)を概観してみると「試験内容を振り返る内容」(図中①~③)に関する記述内容のネットワークが多くを占めていることが分かる。これは、質問紙へ回答したタイミングが OSCE 実施直後であり、記憶が新しく内容を想起しやすかったためであると考えられる。また、「試験」という特質上、実際に行った技術の適否を振り返りたくなるという心理が反映しているものと考えられる。一方で、後者の「学習姿勢を振り返る内容」は、前者に比較して少ないながらも特筆すべき点である。OSCE は単に出題された試験内容の出来不出来を確認するに留まらず、自らの学習姿勢を振り返るという学習者として普遍的で重要な態度を引き出していると考えられることができる。次に、最頻出単語が「緊張」であったことについては、本学部で行われた過去の OSCE (2015 年度)において、Fujio ら¹⁷⁾も同様の結果を報告している。2015 年度当時と 2018 年度 OSCE では、対象学生はもちろん、課題数や出題方法において異なる点がある。しかし、最頻出単語が「緊張」で一致していたことから、「緊張」は OSCE を受験した学生にとって最も強い経験であると同時に、普遍的な経験でもあると考えられる。また、「緊張」が「実習」「復習」といった単語と共に述べられていたことについては、OSCE が単に「緊張」を伴う不快なだけの経験ではなく、その後の学習態

度にも繋がりがあることが考えられる。実際の自由記述では、「とても緊張したが、自分の実力を知りたい機会だった。しっかりと復習して実習に臨みたい。」とあった。このように、学生は緊張した経験を踏まえつつ、実習に向けた自己学習という好ましい学習態度を志向していた。本学部の OSCE は副次的な効果として、「……学生は自分の不得手部分を自覚でき、学生の自己学習を促すことができる。」ことを期待している。共起ネットワークの結果は、実習に向けて学生に期待していた効果が得られたことを示唆している。実習前に行う OSCE に関する先行研究では、学生が認識する意義として、「実習に役立つ」⁷⁾ことや実習に向けた「看護技術の修練の見通し」⁸⁾になることが報告されている。さらに、OSCE で意識付けられた技術項目は、実習の場面で実際に行動できるようになる⁹⁾という報告もある。これらのことから、実習前に行う OSCE は、学生にとって単に看護技術の習熟を査定されるといった緊張や負担が生じるだけの経験ではなく、彼らにとって学習上の有益な経験としても認識されていると考えられる。

以上のことから、OSCE は、学生にとって確かに「緊張」といった経験を与えはするものの、同時に自己学習をはじめとする好ましい学習態度を引き出すきっかけになっており、教育的な意義が高いことが考えられる。

3. OSCE に伴う教育環境の整備の必要性

OSCE の教育的な意義を今後も達成し続けるにあたり、それを実施する教育機関において持続的な教育環境の整備が必要であると考えられる。看護基礎教育における OSCE で先駆的な札幌市立大学では「育てる OSCE」を理念に掲げ、教育環境の整備を行っていることが報告されている¹⁸⁾。具体的な教育環境の整備としては、「OSCE 課題の公開」、「模擬患者の継続活用および養成」、「インストラクターによる指導・評価」などが取り組まれている。ここで挙げられている

「OSCE 課題の公開」は、まさに本学部で 2018 年度に行われたことと一致する。また、「模擬患者の継続活用および養成」についても同様に、本学部の教員である石塚ら¹⁹⁾によってその基盤となる研究が現在進められている。なお、「インストラクターによる指導・評価」については、実習室専属のインストラクターを設置するという取り組みであるが、現時点において本学部で同様の取り組みを行うことは検討されていない。ただし、OSCE はその前後における自己学習の促進や支援が重要である。したがって、自己学習を促進する教材開発や学習環境づくりを今後も引き続き行っていくことが必要である。

本学部の OSCE は、2015 年度から開始し、年度を重ねるごとに実施方法については積極的にブラッシュアップがなされてきた。今後も、これまでの実施方法を踏まえながら、実施に伴う教育環境の整備まで視野を広げて取り組んでいくことが望まれる。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究では OSCE の実施方法の変更の影響について、前年度のデータと比較することで検討した。しかしながら、これはあくまでも 2 年間のみの比較であるため、今後さらに継続的な検討をすることが必要である。また、本研究では実施方法の変更の影響を、事前学習の実施状況のみでしか確認していない。前述したように実習前に行う OSCE は、OSCE までの事前学習のみならず、その後に実習へ向けてさらなる学習がなされるきっかけとなることが期待される。したがって、今後は OSCE 後の学習状況も検討することで、より詳細な検討ができるようになる。また、本研究は自記式質問紙調査であるという性質上、分析に用いたデータはあくまでも学生の自己申告によるものであるという限界がある。特に、事前学習の実施回数や 1 回あたりの実施時間は学生の記憶によるものであり、その信憑性についての課題は否定できない。したがって、今後はこれらの取り組みを正確に把握する方法、

例えば前述したような学生自らが事前学習記録を行うことなどが考えられる。このような方法を用いることは、単にデータの信憑性を高めるという点のみならず、学生の自己学習の一助となる点においても有効であると考えられる。

本研究では OSCE の実施方法の改善の取り組みを、量的データやテキストマイニングによって評価し、さらなる改善の示唆を得た。今後も同様に PDCA サイクルを積極的に回しながら弛まぬ改善に取り組んでいくことが必要である。

VII. 結 論

本研究では、以下のことが明らかになった。

1. 2018 年度に行った OSCE の出題方法の変更（出題範囲の精選と出題内容の明示）は、当初教員側が懸念したような学生の事前学習の取り組みが減少させるなどの負の影響を生じさせることはなかった。ただし、未学習のまま OSCE に臨んだものも少数認められ、これらへの予防的対応が必要である。
2. 学生の自由記述のテキストマイニングの結果、「試験内容を振り返る内容」と「学習姿勢を振り返る内容」の共起ネットワーク群が認められた。学生は試験内容そのものを振り返ると同時に、自分の学習姿勢を振り返っていた。また、最頻出単語は「緊張」で、「実習」「復習」といった単語と共に述べられていた。OSCE は、学生に「緊張」する経験を与えるものの、同時に実習に向けた自己学習などの好ましい学習態度を引き出すきっかけになると考えられた。
3. 今後も OSCE の実施方法を継続的にブラッシュアップしていくと共に、実施に伴う教育環境の整備まで視野を広げて取り組んでいくことが望まれる。

引用文献

1. 文部科学省（2019.10.20）：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm>.
2. 文部科学省（2019.10.20）：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標 <2004. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm>.
3. 文部科学省（2019.10.20）：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm>.
4. 厚生労働省（2019.10.20）：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書 <<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>>.
5. 池西静江, 石束佳子: 【安心! 安全! 納得! 臨地実習での指導・評価と精神的サポートのポイント】 実習前の準備教育 技術演習・技術試験と OSCE の実際, 看護教員と実習指導者, 1(1), 4-16, 2004.
6. 三宅真理子: 看護の統合と実践 I における実習前 OSCE と実習での学習成果. 玉野総合医療専門学校紀要, 9, 41-49, 2015.
7. 多賀昌江, 樋之津淳子, 福島眞理, 他: 学生から見た客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義, 札幌市立大学研究論文集, 3(1):27-34, 2009.
8. 笹本美佐, 小園由味恵, 奥村ゆかり, 他: 実習前 OSCE を通して看護学生が実感した学習成果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 12:79-87, 2012.
9. 三味祥子, 吉田和美, 山本加奈子, 他: 2 年次看護学生が基礎看護学実習前 OSCE をとおして臨地実習で実感した OSCE の学習効果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 89-97, 2016.
10. 勝田真由美, 戸田由美子, 鈴木香苗, 他: 4 年制大学卒業生による在学中の OSCE の効果と課題 入職 1 年目の看護師のグループインタビューより, 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 47-55, 2016.

11. 百田武司, 鈴木香苗, 小川沙苗, 他: 学部2年次対象の成人看護学実習前に実施するOSCEの、評価者間の違いによる評価の一致度に関する検討, 日本赤十字広島看護大学紀要, 13, 1-8, 2013.
12. 鈴木香苗, 百田武司, 小川沙苗, 他: 学部4年生対象の成人看護学実習前に実施するOSCEの評価者間の評価得点の一致度, 日本赤十字広島看護大学紀要, 15, 69-75, 2015.
13. 宮園真美, 村瀬恭子, 本田久美, 他: 臨床判断能力向上をめざした実習前看護技術演習の取り組み, 九州厚生年金看護専門学校紀要, 4, 63-76, 2003.
14. 小澤知子, 原田竜三, 濱田麻由美, 他: 急性期看護学に実習前課題発見型OSCEを用いた授業デザインの実践 ADDIEモデルによる評価と改善, 東京医療保健大学紀要, 11(1), 51-57, 2016.
15. Kanda Y: Investigation of the freely available easy-to-use software "EZR" for medical statistics, Bone Marrow Transpl, 48(3), 452-458, 2013.
16. 樋口耕一: テキスト型データの計量的分析:—2つのアプローチの峻別と統合—, 理論と方法, 19(1), 101-115, 2004.
17. Fujio Y, Sasaki S, Hayashi R, 他: Effects of the OSCE to Motivate Students to Learn Before Practice, Asian J Hum Serv, 15, 13-24, 2018.
18. 中村恵子: 【学生の看護実践能力を育てるOSCEの導入】OSCEの概要と看護教育における意義, 看護展望, 36(6), 516-520, 2011.
19. 石塚淳子, 笹野幸春, 内野恵子, 他: 地域住民が模擬患者役割を担う際の課題, 順天堂保健看護研究, 7, 40-48, 2019.